

特集 思い出と博物館

思い出をアーカイブする

—二〇〇二年ソウルスタイル展と李家—

個人に所有されはじめたとたんに価値を失っていく物たち。でも、そこには思い出があり個人の歴史がある。やがて捨てられる運命にある物の価値を凍結して博物館の収蔵庫に入れるとすると…
調査がうきぼりにした物・個人・社会の関係とは。

物と個人

私がいま原稿を書いているパソコンは三年前に二〇数万円で購入したものである。このパソコンは現在なら数万円の値打ちもないだろう。技術の革新はめざましいから？ 三年間も使ったのだからあたりまえ？ そう考えて、消費経済のなかで生きる自分を納得させるしかない。これは相手がパソコンだからというだけではなく、コンビニで買ったボールペンであろうと、ローンを組んでやっと手にいれた住宅であろうと、われわれの手にするものの多くは購入したとたんに消費され、価値がさがる運命にある。

けれどもいつぼうで、パソコンのハードディスクにつまった三年分のデータや写真は私にはかけがえのないものであって、おいそれとそれを手放すことはできない。さいわいパソコンには自身の歴史の一部を記録しておく仕掛けがあり、人手にわたすまえに情報としてこれを取り出し、保管しておけばよい。いや真実は、そもそも個人の歴史をまつさらにしてからでなければ市場価値がつか

佐藤 浩司
Sato Koji

しなっている。この個人覚醒の時代に。それだからこそ、と云うべきなのか。

私、という個人が直面している問題は、このパソコンの例がよく示しているのではないかとおもふ。身の回りにあるほとんどすべての物にはパソコンのような記憶装置がない。物とともに経てきた個人の痕跡は、物とともに捨て去られる。パソコンにしてからが、不注意な事件でついたキズも愛着のあるシールも、物自体がなくなってきた歴史をすくうすべはないのである。そして、まるで当然のことのように、そ

ない。かくほど個人の歴史、つまりはわれわれの人生には価値がなく、社会との接点をう

図2 デジカメで撮影した画像はパソコンに移され、パソコンの画面を確認しながらインタビューをおこなう。2000年11月。機材の進歩したいまならなんでもない調査方法だが…



図3 1ヶ月におよぶ家のなかの調査で撮影した物の写真は3200点。それとおなじだけの調査票の山を前にして、この無謀な調査の意味がわかるようになったのはずっと後のことなのである



図1 物の調査がはじまると、いつしか李家のオモニは思い出の整理作業を開始していた



うした事態を私はうけいれている。人間は道具をつかいこなすことで人間たり得ている動物である。だから、身の回りの物をすべてはぎとった先に正真正銘のアナタがあらわれる、

末な物がつむぎだす過ぎし日の物語。つぎつぎと未知の世界を発見するおどろきに、調査にたちあつた者同士が興奮していた。個人の思い出が社会化された瞬間といつてもよいとおもう。家の空間が物の発するおびただしい情報の洪水である。物にたよらねば自己確

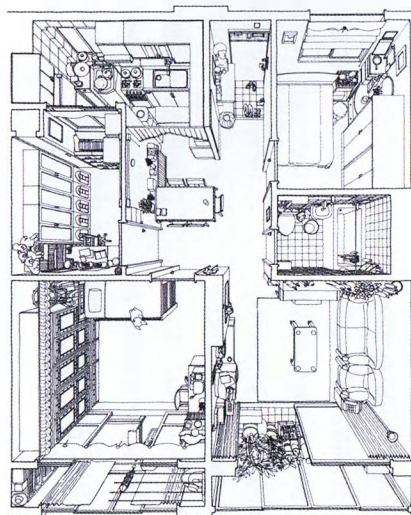


図7 上から覗いたアパートの間取り (作図:清水郁郎)

図8.9 展示場にはアパートの空間が再現され、家財道具一切合切がはこびこまれた。来館者は李家にまねかれた客さながらに、ちょっとだけ厚かましく(上から覗かれているとも知らずに!)部屋の隅々を検分してまわる



思い出を語るというついでに、自身が所有するすべての物について、それにつながる思い出や由来を誰かに聞いてもらおうなどという経験をもつた人間はおそらくいないにちがいない。この調査は、聞き取りをする側にもされる側にも不思議な変化をもたらすことになった。それまで取るにたらないガラクタ同然にあつかわれていた物が、その履歴を語るうちに、捨てるにしのびない大切な物にみえてくる。家のなかにちらばる無数の物のひとつひとつが、じつは自分の人生を構成する貴重なモザイクの一片であつたことに気付きはじめる。粗

た。しかし、数日で終わる予定ではじめた仕事は、家の隅々から際限なく出てくる物のために一ヶ月ちかくにおよんだ。家族の協力がなくてはとてもできない作業だが、本当の「協力」は調査の終了後に待っていることになる。ともかく、このとき撮影した写真は三三〇〇点。お婆さんの手作りの衣服をのぞいて、そのほとんどが市場に出まわる商品でしめられていた。

認ができない現代家族の本質をそこに見たおもしろい。私(たち)は国や社会について語るのとはただし、私的なことはあまり公然と語るべきではないと考へている(最近はそのとも断言できない)

ようだが、すくなくとも私の感情はそうのように馴化されてしまっている。韓国を代表する家族として日本国の展示に登場するとなればなおさらで、李家の人たちも自分を表現する以前にことさら韓国らしさをアピールしようとしていたのだ。彼我のちがいに、現在は世代間の相違のほうが大きいかもしれないというのに。身の回りの物にたいするインタビューは、そうしたアイデアオロギーの垣根をもなしくずしにする力を秘めていた。



図5 李家のアボジを44点の所持品で表現すると...

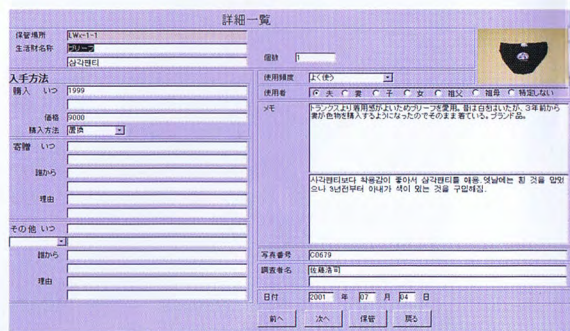


図6 調査票の項目。このデータベースは韓国生活財データベースとして公開されている <http://www.minpaku.ac.jp/menu/database.html>

物と思い出のゆくえ

韓国展は「二〇〇二年ソウルスタイル」李さん一家の素顔の暮らし」というタイトルで開催される。もはや李さん一家は、韓国の生活文化を紹介するための一事例として展示に登場するのではない。この展示はあくまで李さん一家を知るためのもの。その先に韓国社会がうかがえればよいと発想を逆転させていた。

生活財調査における思い出

二〇〇二年に韓国展を企画したさいにかかえていた問題をいま整理すればこのようなことになる。もうすこし正確に言うと、調査や展示を通じて、直面している問題の本質があらかになつていったのだつた。

この展示企画は、現代韓国の生活文化を紹介す

るための事例として、ソウルのアパートに住むある家族の持ち物をしらべることから出発した。当時、とくに大きな意味をその作業に認めていたわけではない。間取りだけではわからない日本との相違がすこしでもあきらかになればよいといった程度の問題意識しかなかった。ちょうどデジタルカメラが登場して、容易に多量の写真をあつかえるようになったこともあって、部屋ごとにそこにおかれた物をすべて写真に撮り、その由来をひとつひとつチェックシートに埋めるだけの単純作業のはずだつた。購入や寄贈の履歴から、この家族がめぐる社会関係がわかるのではないかと期待し

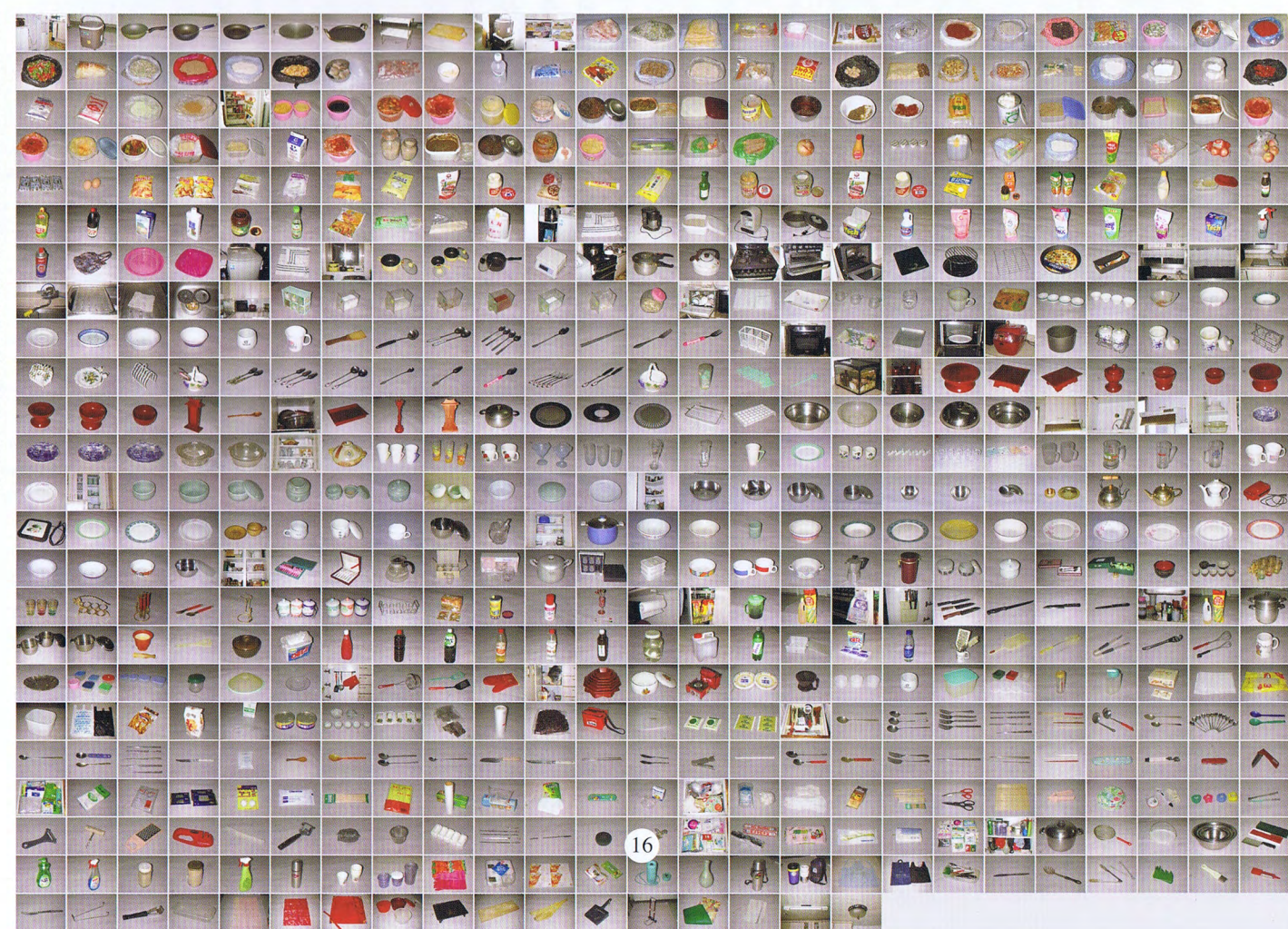


図4 台所にあつた物ははじめて五九二点、空間の意味を物がたつて

ソウルのアパートにあったすべての物は、ゴミ箱のゴミにいたるまで展示場にはこびこまれ、李先生一家の素顔の暮らしを再現するための貴重な資料になった。展示場には足りないのは、ただそれらの物の主人公だけ。まるで現代のポンペイさながらに、ソウルスタイル展はオープンした。小学生の団体がやってきて、おかまいなく夫婦のベッドにもぐりこんでゆくさまを、私は複雑なおもいでながめていた。

この展示について、一家の所持品をすべて奪うのは調査の暴力だの、金力で買い取ってきただけの陰口をたたかれたことがある。李先生一家の名誉のために書いておくが、それはまったくお門違いな詮索というものである。

調査が終わり、展示の方針がきまってきたから、電子メールを駆使して物に対する聞き取り作業はつづけられていた。思い出すすでに李家だけのものではなくなっていた。さらに多くの人たちにこの事実を知ってもらいたい。この破天荒な展示をつきうごかした情熱の正体はどのような願いにあった。李家の物たちは、現実生活のなかで消耗し、やがて捨てられる運命を受け入れるよりも、その価値を凍結して博物館の収蔵庫にはいることをのぞんだのである。

現在、李家の資料は国立民族学博物館に収蔵され、一家の存在のあかしでもあった思い出情報は韓国生活データベースとして公開されている。二〇世紀大量消費社会の担い手であったマイホームを二〇〇〇年一月時点で凍結保存した、世界のどこにも存在しない資料がここに誕生した。

調査当時三二〇〇点にすぎなかったデータベースは、収集にもなう資料整理で一〇〇〇〇点をこすまでにふくれあがっている。風呂のタオル一

式とされていたものが、じつは記入入りのタオルそれぞれに異なる情報がこめられていることに気付いたからである。スナック写真、葉書、名刺など、捨てられずに家の片隅にあったものにはかならずそれなりの情報がある。ちびた鉛筆が忘れていた友人の記憶をよみがえらすこともある。なぜ現代人はこんなにも多くの物にかこまれていたのか、という問いかけへの回答がそこに用意されている。

ところで、もし、この調査・展示が二〇〇二年ではなく二〇〇八年におこなわれていたとしたら、調査の意味はもっとちがったものになっていたかもしれない。この数年のあいだに、写真や手紙の類はもはや物ではなく電子的なコンテンツとして記録されるようになった。個人の思い出として、物とともに消え去る運命にあった情報の多くが、現在は電子メディアにうつされ、いつのまにかインターネット上でアーカイブされているのである。個人の歴史と社会をむすぶ可能性の一端がひらかれたといってもよい。宗教にかわるあらたな精神文化の登場と私にしかねないこの精神文化の未来は、いまだはるかな想像の域外にある。

国立民族学博物館特別展「二〇〇二年ソウルスタイル・李先生一家の素顔のくらし」は二〇〇二年三月二一日に一般公開され、七月二六日に閉幕するまでの一〇二日間に、のべ五八、八三一人の入場者を

図10 展示場の周囲をぐるりとめぐる3200点の調査写真
(展示場デザイン:大野木啓人/中西 啓)



むかえた。この展示にあわせて制作されたマルチメディア作品(李家の日常を徹底的に追ったもの)は現在も常設展示場のビデオテークブースで公開されている。

〔参考文献〕

- ・ 朝倉敏夫・佐藤浩司『二〇〇二年ソウルスタイル 李先生一家の素顔のくらし』千里文化財団、二〇〇二
- ・ 佐藤浩司ほか『普通の生活・二〇〇二年ソウルスタイルその後 李先生一家の三三〇〇点 INAX 出版、二〇〇二
- ・ 佐藤浩司「家の中の物から見えてくるもの」『二〇〇二年ソウルスタイル』展から」野島久雄・原田悦子(編)『(家の中)を認知科学する』変わる家族・モノ・学び・技術』新曜社、p.81-120 二〇〇四